

なぜ親が我が子を死なすのだろうか

親が子どもの命を奪う痛ましい事件が後を絶ちません。「なぜ？」と思うのが当然ですが、子どもを守る為には、ただ傍観者で居るだけではダメ。

私は、50年前、子どもに関わるようになって変えていないことが2つあります。1つは、子ども時代に運動で人と競わせないこと。2つ目は、たとえ子どもといえども「泣いて自分を通させない」ということです。イヤだと泣いて嫌がることでも子どもはちょっとした工夫や手順を変えるだけでやるようになり、嫌いなことでも好きになれる素晴らしさを持っています。

ところが、あまりにも子どもが泣くと母親が「嫌なことはやらせたくない」と子どもをかばう。子どもは内心「しめしめ」である。

「三つ子の魂百までも」でこの方法で「何が何でも自分を通す子どもの心」は、大人になっても成長せず我が子とさえも対等に自己主張をし、自分の主張を通す為には手段を選ばない。

つまり、子ども時代に泣いて自分を通すことを許す育児法は、大人になっても人(子ども)のことより自分最優先で行動する人間になると考えます。

最近、街のあちこちで泣きわめく子どもを見かけます。全員がひどい親になるとは限りませんが、泣くことで自分を通して子どもにとって何のプラスにもなりません。「ちゃんと自分のことを言える子」に育てたいものです。